

「障がい」への理解を深める

長井市立長井北中学校 三年 遠藤 聖子

私は障がいのある人たちと関わったことがあります。

はじめ、障がい者に対して私の中であまり良い印象がありませんでした。私の母は放課後等デイサービスに勤めています。私は、中学一年生の夏休みに職場体験としてその施設を訪れました。関わる前は会話をするのも難しい子ばかりだと思っていましたが、そうではありませんでした。話すのが難しい子もいれば、とてもよくしゃべる子もいて、きちんと会話することができました。私と話が合う子がいたり、私に質問をしたり、自分の好きなことを教えてくれたり、楽しい時間を過ごすことができました。しかし、相手の子が思っていることが分からず、どうしてもいいかわからないこともありました。その時は、職員に人に教えるてもらいましたが、接することの難しさを改めて実感しました。その日から私の中で障がい者の人に対するイメージが変わりました。

障がいのある人はない人と同じで一人の人間だから、もちろん個性があって当たり前だと思えます。そのため、その子に合わせた対応が必要だと感じました。

職員の人に障がいのある子たちに関わる上で必要なことを訊ねたところ、「一人ひとりができることをいかに伸ばすことができるか、それを手伝って、これから生きていく上で必要なことを伝えていきたい。」とおっしゃっていました。

身体や知的に障がいのある人を「障がい者」、それと反対に障がいのない人の事を「健常者」と言うことに対して違和感を覚えました。「健常者」は「常に健やかな者」という意味です。

障がい者は健康な者ではないのでしょうか。障がいのない人はいつでも健康で存るのでしょうか。そうとは限らないのではないかと思います。その言葉自体が差別に当てはまると私は思いました。障がいのある人となない人では生活への不便さが異なるのは確かです。昔に比べれば、バリアフリーにより、小さい子どもや障がいのある人やない人、お年寄りなど全ての人を利用しやすい環境に変わってきています。環境だけではなくユニバーサルデザインで身体障がい者も使いやすい道具や文字などが増えてきています。さらに、障がい者との障壁をなくしていくことが大切だと考えています。今、私たちにできることは障がいのある人やない人に対して、分け隔てなく接することではないかと思えます。

私は母の職場の雰囲気や職員の人たちを見て、「このような場所で働いてみたい」「障がいのある子どもたちと関わることでできる仕事に就きたい」と考えています。

今年はまだきちんと関わる機会がありませんが、これから機会があったら、子どもたちと関わっていききたいと思っています。